様式 C-19

# 科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 5 月 20 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2007～2010
課題番号：１９７２００１９
研究課題名（和文）２０世紀における「生物／無生物」概念の研究―思想史と医学史の視角から
研究課題名（英文）A study of the concepts of "living/non-living" in the twentieth century : in the contexts of the history of medicine and the history of philosophy.
研究代表者
田中　祐理子（TANAKA YURIKO）
京都大学・人文科学研究所・助教
研究者番号：３０３４６０５１

研究成果の概要（和文）：本研究においては①２０世紀における「生物／無生物」概念についての思索を、哲学文献と医学・生物学文献のそれぞれについて集積し、両者の相互影響を考察する。②２０世紀の哲学・医学的思考の原点を１９世紀の思想史・医学史に探る、という二点を行った。結果として、１９世紀科学言説に潜む保守性が保証した未来の科学研究の道筋と、哲学的想像力がラディカルに推し進めることとなった未来主義的思考との間の、逆説的な相互影響を発見した。

研究成果の概要（英文）：In this study I pursued following two subjects: 1) collecting philosophical and medical or biological works in the 20th century concerning the ideas of the "living/ nonliving" and examining the interactions among them; 2) tracing the origins of those ideas to the philosophies and medical or biological thoughts in the 19th century Europe. I came to the conclusion that there existed paradoxical, and often complementary, interactions between rather conservative attitudes among natural scientists of the 19th century which paved the way for the research activities in the following century and the more radically futuristic vision conceived by philosophers.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合　計 |
|---|---|---|---|
| 2007 年度 | 900,000 | 0 | 900,000 |
| 2008 年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 2009 年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 2010 年度 | 800,000 | 240,000 | 1,040,000 |
| 年度 | | | |
| 総　計 | 3,300,000 | 720,000 | 4,020,000 |

研究分野：哲学
科研費の分科・細目：哲学・思想史
キーワード：現代医学思想史、現代哲学、言説史、生物／無生物、生命科学史

## １．研究開始当初の背景

研究代表者は、本研究以前に、(1) エイズをめぐる社会・医学・文化の相互関係をめぐる研究、(2) 生命倫理の論理基盤についての研究、(3) １９世紀医学における現代性の生成の条件についての言説分析的研究という順序で研究を続け、これらに続くものとして本研究の課題に至った。これまでの３つの主題を言い換えるならば、それは①現代において人間の病気の経験とはどのような条件のもとに置かれているのか、②この「病気という経験」をめぐって社会と医学（科学／専門知）とはどのような関係性を作りだしているのか、③そのような関係性を要請するところの現代医学の専門性とはそもそもどのようなものであるのか、を問うことであったと言え

る。特に(3)および③の研究内容を詳説すると、これは今日にいたる現代医学の原点として微生物学の誕生を設定して、この成立史について言説分析的に再構成しようとするものであった。

なお、その際には微生物学は２つの特性から現代医学・生命科学の「原点」として選ばれた。すなわち、a.医科学的言説とくに分子生物学の基盤としての知、b.感染症を象徴的な舞台として医学に独特な社会的権威を与えることとなった知、の２つの意味においてである。

したがって、本研究にとっては、現代医学および生命科学言説とは、常に内在的・外在的の両面から観察すべきものであり、またそれは他ならぬ「人間学」において必ず統合されるべき研究対象である。本研究の課題とは、研究代表者のこれまでの個別研究を総合し、これらの研究作業の過程で見出された多様な言説、文献、史資料を、「生命」をめぐる人類の２０世紀的経験という１つの空間のなかに布置的に包合し呈示することで、現在までの研究からの何らかの結論を形にしたいとの思いから設定された。よって、上記の三つの過去の研究課題からも言えるとおり、本研究は国内外において既に長く進められてきた医学史・生命科学史研究と、科学をめぐる知識社会学的研究とに、極めて多くを負っている。それと同時に、本研究はフランスを主な発祥の地とする認識論の思想家の業績にもその問題設定を多く与えられているものであるし、また同時にこの認識論的思考から発展した哲学的思索の展開にも深く連動している。

２．研究の目的

本研究は、２０世紀における「生物」と「無生物」をめぐる思考を、医学と生物学を中心とする科学思想史と哲学史の領域において、総合的にたどることを目指した。この研究は、現代思想史の一つの基盤的研究の試みとして企図された。

中でも特に本研究では「生物／無生物」という概念を指標として、この対概念が２０世紀の思想の展開においてどのような意味を持ち、また影響を及ぼしてきたのかを系譜学的に整理・記述することを第一の目的とした。その際には、２０世紀における「人間」概念についての思考の歴史に、同時代の生命科学の展開が与えた影響の深さを分析することもまた重要な課題として位置づけられた。

生物学（生命科学）の進展にともない科学者のうちで「生命」概念の問い直しが切迫したものとなるのが２０世紀であり、このことはやがて生命倫理学の誕生にもつながる思考課題を「生物学に基づく人間の癒しの知」たる「生医学（Biomedicine)」の現場にもたらした。この課題をめぐって、専門家たる医学研究者たちは多くの言説を残しているが、これらはその著者たる研究者たちのもつ独自の専門的知識、そのディスクールの特質そのものから分析しておくべき極めて重要な思想史資料である。一方で、これらの専門知識は、医療といういわば応用（適用）の場において直接人間の身体に触れるものであるとともに、ある一定の権威を持つ知の体系として、人間の存在に深く触れるものとしてもその影響力の射程をもったと考えられる。

このことから、本研究においては、医学・生物学を中心とした科学思想史と哲学史との間に、２０世紀を通じた「人間学」の問い直したる思想動向のダイナミズムを理解する材料となる、重要な知と思考の相互交渉の場面を探ることとした。さらに本研究は、この医学・生命科学と思想との相互交渉の歴史について、その第一次資料を集積し整理し直した上で、今後の思想史研究のためのアーカイブズとして呈出することを目指した。

３．研究の方法

本研究では医学・生命科学と思想との相互交渉の歴史を、その第一次資料を集積し、整理しなおし、今後の思想史研究のための基盤となれるアーカイブズを作ることを目指した。その際に収集する基幹的文献資料の整理のための枠組みは以下の４点であった。

(1) 生命科学者による「生物／無生物」に関する思考。

(2) 哲学者による「生物／無生物」に関する思考。

(3) 生命科学研究の領域における「生物／無生物」概念を定義する言説。

(4) 生命科学により「生物／無生物」に関する定義についての社会科学的分析および批評。

本研究においては、この枠組みにしたがって多様なテクストを収集するとともに、それぞれの思考の展開を整理するように努めた。そして、この４つの思想の流れの相互関係についても分析した。

また、これらの分析結果については、思想史、科学史の研究者たちとの研究会、学会の機会において試験的に報告し、批判を仰ぐとともに、これに応じて適宜修正するように努めた。

４．研究成果

本研究では２０世紀の「生物／無生物」の概念について、上記「研究の方法」に記した４種の枠組みで数多くの一次資料を収集するとともに、これらの項の間に発生している相互影響を分析した。

この分析の中で特筆すべき主題としては、以下の通りである。

①「(1) ＝生命科学者による「生物／無生物」に関する思考、および(3)＝ 生命科学研究の領域における「生物／無生物」概念を定義する言説、からの、(2) ＝哲学者による「生物／無生物」に関する思考への影響、あるいは(4) ＝生命科学により「生物／無生物」に関する定義についての社会科学的分析および批評という形での反応」という関係性については、比較的容易に確認することができた。特に、生命科学による発生の過程の解明が進むにつれ、社会あるいは知識というものについての哲学者による表象に、発生学的な性格が認められるようになったのは興味深い。一回性の概念や、発生の過程における条件と個体の関係性、偶然性と不可逆性についての問いといった主題は、人間学、社会哲学、概念の歴史に大きく影響を及ぼしていると認められる。

②しかし一方で、「上記(1)および(3)に内在している思想史的な屈曲と、ときにこれを凌駕する形で未来主義的構想を展開する(2)との間のずれ、対照性」というものについては、さらに詳細に検証・考察していく必要があると考えられる。「サイエンス・ウォーズ」といった事件にも強く表れている通り、生命科学の言説にしばしば哲学者が認めるラディカルさ、すなわち人間存在の根幹に関わるようなパラダイム・シフトというものを、科学者は意図していない場面が数多くある。また、むしろ生物学・生命科学の言説においては「個体」「人間」「生命」といった基本概念に対してはこれを堅持しようとする傾向が見られる。この特徴は、「研究の背景」に触れた通り生命倫理学の模索という、新しい中間的学問を要請することにもなっているが、同時に、その基本概念の堅持は科学研究の実践そのものにとっても重要な条件となっているとも考えられる。

本研究においては、上記②に関する検証作業として、２０世紀生物学・生命科学研究の古典的なパラダイムとなったと考えられるロベルト・コッホの研究とルイ・パストゥールの研究の方法の比較を通じて、彼らの科学的構想における「生物」「無生物」の概念の役割を探った。特にパストゥールに関しては同時代の化学と生物学の位置づけを再検討し、そこにおける「生命」の概念の思想的保守性に注目した。パストゥールは同時代の社会哲学、特に科学主義、実証主義と呼ばれる思潮を激しく非難しているが、そこにおける世界観と知識観については、単に彼の個人的信仰や信条の問題としてだけでは理解できない問題が含まれている。また、このような事例に認められる科学者の保守的世界像は、２０世紀の科学者の言説にも無関係なものではないことが確認できた。

この１９世紀における科学者自身の「生物」「無生物」概念に確認しうる錯綜性と、２０世紀における科学者・哲学者による「生物」「無生物」概念を対置し、この両者の間にある異同についてさらに詳細に検討することは、今後に残された重要な課題であると考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
①Yuriko Tanaka, Koch’s technologies and postulates: How they work together in connecting the material and the human in the foundation of bacteriology, *Zinbun*, 42, 2011. 査読無

〔学会発表〕（計６件）
①田中祐理子「「１９世紀医学」をめぐるカンギレムとフーコーの対話」、表象文化論学会、東京大学駒場キャンパス（東京都）、2010年７月４日.

②田中祐理子「『コッホの条件』と細菌学の誕生」、共同研究「色道の言語をめぐる文明史的研究」研究例会、京都大学三才学林（京都市）、2010年1月27日.

③田中祐理子「川越・鈴木編『分別される生命』第5章～第8章を中心に」、「医療・社会・環境」研究会・科研費（基盤A）「日本の近代化と健康転換」（研究代表者・鈴木晃仁）共催「『生命というリスク』『分別される生命』書評会」、同志社大学今出川校舎（京都市）、2009年3月1日.

④田中祐理子「病原菌と千里眼―微生物学史のひとこまから」、京都大学人文科学研究所開所79周年記念講演、京都大学人文科学研究所（京都市）、2008年11月20日.

⑤田中祐理子「ルイ・パストゥールをめぐって――果実と種子」、共同研究「啓蒙の運命」研究例会、京都大学人文科学研究所（京都市）、2007年10月5日.

⑥田中祐理子「千里眼者あるいは表象の多様――ジローラモ・フラカストロについて」、共同研究「文明と言語」研究例会、京都大学三才学林（京都市）、2007年6月30日.

〔図書〕（計１件）

①田中祐理子、他、名古屋大学出版会、啓蒙の運命、2011、342-369、493-521.

6．研究組織

(1)研究代表者

田中祐理子（TANAKA YURIKO）
京都大学・人文科学研究所・助教
研究者番号：30346051